

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01033

研究課題名（和文）近世フランスの書簡と公共空間：オーラルとエクリの間

研究課題名（英文）Letters and public space in early modern France: between oral and ecriture.

研究代表者

長谷川 まゆ帆（Hasegawa, Mayuho）

東京大学・大学院総合文化研究科・名誉教授

研究者番号：60192697

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：18世紀半ばにベストセラー作家となったグラフィニ 夫人の叙述を対象に、女の叙述が生み出した新しい叙述や感性を探り、オーラルとエクリの狭間に揺れ動く感情の動きや表現のしかたを考察した。この時代は書簡体小説が流行したことで知られるが、グラフィニ 夫人もまた書簡体小説を書き、男友達に宛てて2000通を超える私的書簡を残している。彼女にとって書くことは自身の感情を語り、伝えることであり、それが作家としての創造性の原動力になっていることを考察した。既発表の成果（2020年）では、彼女のオーラルとエクリがどのように出会い、創造へとつながっていったかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

啓蒙期の女性作家は、自分の感情や判断を直截に語り、表現するのに長けていたが、それはオーラルとエクリが影響を及ぼしあっていたからでもある。一方、現代ではインターネットの普及が人々のコミュニケーション回路を再び変えつつある。しかし声や身体を伴うオーラルなコミュニケーションは、エクリの浸透と広がりによって消えたわけではなく、インターネットの時代にも形を変えて影響を及ぼしている。印刷革命のもたらした近世期の社会変化を声や身体との関りを通じて考察することにより、現代社会の変化を改めて問い直し、よりよく理解していくヒントが得られる。

研究成果の概要（英文）：This research explores the new narratives and sensibilities created by women's narratives in the mid-18th century, focusing on the narratives of Madame de Graffigny, who became a bestselling author, and examines the emotional movements and modes of expression that oscillate between the oral and the eclipsed. The period is known for the popularity of epistolary fiction, and Madame Graffigny also wrote epistolary fiction, leaving over 2,000 private letters to her male friends. The paper examines how, for her, writing was a way of talking about and communicating her own feelings, and how this was the driving force behind her creativity as a writer. In a previously published result (2020), I examined how her oral and ecrit met and led to her creation.

研究分野：フランス近世史

キーワード：啓蒙 感情包摂 他者 エクリ オーラル フランス 18世紀 女性

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 1980年代以降、フランス近世史は、フランスのロジェ・シャルチエやアメリカ合衆国のロバート・ダートン、イギリスのピーター・パークらの開拓により、手稿および印刷物(書籍や新聞ほか)をモノ(物質文化)とみなし、そこに書かれているエクリのみならず、それらを媒介する紙や印刷職人、販売に携わっていた業者など、書物の生産に関係していた多様な人間を視野に入れて、エクリとその外部の関係性を探る研究が発展してきた。当初、企図していたのはこうした研究動向を踏まえて、具体的な地域や人物に即して、オーラル(人間の体験、発話)とエクリ(叙述や作品)が相互にどのように結び合い、結晶化していくかを考察することであった。オーラルとエクリの関係性を問うことは、もともとは、文学研究者クリスチャン・ビエの論稿に触発されたものである。ビエも問うているように、印刷文化がどのように人々に受容され、どのような関係性を構築し、いかなる表象を構築していくかを問うことに意義を見出していたからである。書物や叙述の考察を言説にのみ限定せず、書物の物質性や象徴性、市場原理や表象としての影響力などにも目を向けて、人と人との絆の形や、感じ考えるしかたにそれらがどのように影響を及ぼしていくかを探りたいと考えた。

(2) 一方、18世紀は書簡体小説が流行した時代であり、とりわけセヴィニエ夫人の孫娘による書簡(1725年)の出版が与えた影響は大きく、その影響を具体的な作品を通じて探ることを考えていた。拙書『女と男と子どもの近代』(山川出版社 2007年)でも触れているように、忘れられた啓蒙期の女性作家グラフィニー夫人に強い関心を抱いていたこともあり、このオーラルとエクリの関りを考察する手がかりとしてグラフィニー夫人の書簡及び作品群をとりあげて考察することで、この時代に一人の女性が読むことや書くことをどのように実践し、また会話や日常性のなかでのつながりのなかでどのように学び、書くことへと結晶化させていくかを考察できると考えた。実際、膨大な書簡が残存し、数は少ないが考察に値する小説や戯曲がいまも参照可能なグラフィニー夫人は、考察対象としても最適であった。

(3) さらに10年ほど前から、他の代表者の科研に分担研究者として参加させていただく中でエゴ・ドキュメント研究の意義に触れてきた。またそうした科研の活動の一環のなかで、西洋史学会などでグラフィニー夫人の叙述について紹介する機会にも恵まれた。そのことも本研究を本格的に始動する基盤となっている。18世紀と一口に言っても、その叙述にはいろいろあり、同じような主題を扱っていても、人やジェンダー、職種、地域によって語り方には差異がある。それがフィクションや個人の主観ではあれ、その叙述そのものに着目する必要があると考えたのは、こうした叙述に内在するエゴ・ドキュメントとしての側面に活用の可能性を見出したからである。

(4) 18世紀は、それまで曖昧であった「公=おおやけ」なるものと「私=わたくし」なるものの区別が徐々に鮮明になっていく時代であるが、その変化に書籍や新聞、図像の増加が密接に関わっていることは言をまたない。とくにこの時代に流行する書簡体小説や手紙を書くことが大きな粹割をはたしていたと思われる、それらがどのように関わっていたのかを探りたいと考えた。個人の「わたくし」とみなされる領域は最初から明確に存在したのではない。むしろ「隠されるべきもの」として語られ、表象され、公共空間のなかに流通するようになることで像を結び、構築されていく。こうした「わたくし」なるものの表象の歴史を探ることは、近・現代社会の形成を考えるうえでも重要な意義があると考えた。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究のねらいの一つは、啓蒙と読書の関係性やオーラルとエクリの間の往還に基づくコミュニケーション回路の実態を個別具体的な対象のなかで探ることであった。そのために18世紀半ばに書簡体小説『あるペルー人女性の手紙』(初版1747年)を出版してベストセラー作家となったグラフィニー夫人(Madame de Graffigny, 1695-1758)を取り上げ、この人物のエクリとその外部の関係性を探ることを主要な目標の一つに掲げた。

(2) もう一つのねらいは、この女性作家の生きた時代や空間に着目し、女性史として、社会史としてこの人物の生涯を理解していくことであった。というのも、ロレーヌ地方は、大国の狭間にあり、常に戦争や分割の危機にさらされてきた地域であるが、グラフィニー夫人の生きた18世紀初頭はライスウィク国際条約の終結により、長いフランス軍の占領から脱し、ロレーヌ・エ・バール公国として自律を許され、再建が試みられていた時期にあたる。グラフィニー夫人はDVの夫の死後、1725年からこの公国の政務の中心であったリュネヴィル宮に侍女として10年ほど仕えた。彼女がリュネヴィル宮に過ごした前半期はこの公国の絶頂期にあたるが、しかしレオポルドI世公の死去(1929年)により、1730年代に入ると、フランスの画策により公国はフランスの支配に再び組み入れられていく。完全な併合までにはなお30年ほどを要したが、1737年、政務の中心であったリュネヴィル宮はその機能を停止し、公国そのものが衰退の危機に瀕した。グラフィニー夫人の生涯のなかで最も平和で幸福でもあったこの時期のリュネヴィル宮に着目し、その人的交流、感情を伴う経験のさまを社会史として明らかにすることをめざしていた。

(3) 上記とは異なる視点であるが、感情史としてグラフィニー夫人の叙述を考察することもねらいの一つである。グラフィニー夫人は啓蒙の息吹をリュネヴィル宮で感じ、それによって啓蒙期の学者や文化人との交流に開かれていくが、その後、故郷を離れ、パリに暮らすようになったグラフィニー夫人の叙述には、ロレーヌでの思い出やロレーヌ出身者への複雑な思いがしばしば表出されている。愛犬ゾンを残して故郷においてきた犬たちのこと、文通相手のドゥヴォーや恋人デマレ、ロレーヌで育った姪のミネットとの関

りは遠く離れてますます重要になり、心の内から決して過去になることはなかった。彼女の感情生活はなおロレーヌとともにあったと考えられる。そうした愛憎の内容を彼女の言葉や叙述に即して詳細に検討することで、18世紀の人間の感じ考えるしかたを時間のなかで照らし出していきたく考えた。また言語や習慣の違いによるフランスや大都会パリへの違和感、社会経済的な苦難、病や孤独による不安を、グラフィニー夫人はどのように語り、対峙しようとしていたのかを、その文体や思考の回路の考察を通じて探ることが、ねらいの一つとしてあった。

### 3. 研究の方法

- (1) 研究方法としては、一つはグラフィニー夫人の叙述から筆記の特質と感情表出を抽出することである。表記上の揺れを伴いながらも、グラフィニー夫人の叙述は、セヴィニエ夫人の手紙（1725年出版）の影響もあり、当時としては極めて感情を饒舌に臨場感をもって表現する叙述であり、それ自体が新しい表現スタイルを伴っていたと言っても過言ではない。そうした叙述の特質を、彼女の書簡から抜粋し考察することがここでは不可欠である。ただし本研究においては、そのためにテキストをOCR化して統計的な語彙分析をすることまでは想定しておらず、こうした研究手法については今後の課題であると今は考えている。
- (2) 本課題でのもう一つの研究方法は、リュネヴィル宮での人的・物的交流について探ることである。たとえば、車大工からロレーヌ公の図書館司書となり、晩年に自伝を残したヴァランタン・ジャムレ・デュヴァルは、ロジェ・シャルチエらの研究グループの中で開拓され、知られるようになった人物であるが、彼こそグラフィニー夫人が住まうようになった時期にリュネヴィル宮にいた人物である。その著述を出版物および手稿の両方から蒐集して、検討することが、本研究の重要な手がかりとなる。
- (3) ヴォルテールなどがリュネヴィル宮を訪れたことが縁で、後にグラフィニー夫人は、パリに移動する途中でデュシャトレ夫人のシレー城に数か月を過ごしている。そこでの交流の内実を探ることも、彼女の叙述の特質を考察する上で不可欠である。そのためにシレー城については現地調査も行い、当時の移動手段や距離についてもシミュレーションし、体験的に探ろうとした。

### 4. 研究成果

- (1) コロナもあり、当初考えていた調査は十分に行うことができなかった。しかしフランスの国立図書館の公開しているガリカ（BnF Gallica）を通じて、18世紀に出版されたグラフィニー夫人の著作については、代表作である小説『あるペルー人女性の手紙』や戯作『セニ』など、ほぼすべてについて原著で入手し、データベース化することができた。『あるペルー人女性の手紙』については、18世紀を通じて再版/改訂版、英語、イタリア語、ドイツ語など他言語への翻訳版が多数出版されていることもみえてきた。今の時点ですべてを網羅したとは言えないが、少なくとも出版の拡がりについては確認することができた。
- (2) その中で彼女の主著な著書であるベストセラー小説『あるペルー人女性の手紙』（1747/1752）は、当初、匿名で出版されたため、允許を経っていない出版にありがちな海賊版の出版をすぐさま招いたこと、また、われこそが著者であると名乗り出る別人物が現れて再版を出版するなど、著者にとってはまことに不本意なことが数年の間に起きていることも明らかになった。そのため、グラフィニー夫人は5年後に本名を公開し、出版許可も正式に得て増補改訂版の刊行に至る。この改訂版には、著作権の保護を重視するチュルゴ—の助言があったことが明らかになった。
- (3) また再版があることから、初版との比較が可能であるため、その比較を行った。長めの序文が付加され、インカ帝国の滅亡とその文化の特質に関する歴史的な考察が冒頭に置かれ、また2章分の書簡が付け加えられてもいる。内容的にも叙述の表現が一部改変されるなど、マイナーながら、初版のトーンがやわらげられていく変化が確認できる。またグラフィニー夫人の死後10年以上を経過した1770年代になると、小説の再版に際して、グラフィニー夫人自身の手によるジリアの語る書簡体小説と、続編と称する関連本——スペインに幽閉されたアザの側からの弁明小説（書簡体）——との合本が現れてくることも明らかになった。ここには出版上の販売戦略が影響しているが、もともとの原著の著者の意思とは別に、他者によって書かれた続編が原著とともに著作権と無縁な状況のなかで流布されていくさまがみてとれる。これは出版人たちの事情によるものであるが、こうしたことは、医学書などの考察（長谷川まゆ帆『さしのべる手』参照）でも論じているように、この時代の表象がどのように作られ、流布させられ、あるいはまた作られた表象がどのように受容され、改編されていくかを考察する上できわめて重要な観点である。これはまさにシャルチエなどが開拓した書物と出版業者、読者との間のモノを介した関係性に関わる。こうした出版戦略や出版事情とその構造については、今後も探査を続けたいと考えている。
- (4) 現地での文献探索、周辺事情の調査は、最終年度の夏に可能になったことであるが、その際に、パリ国立図書館やリュネヴィル宮跡の博物館での現地調査を経て、2000年以降に出版されているグラフィニー関係の研究書やシンポジウムの記録などを多数入手することができた。グラフィニー夫人の肖像画は、それ自体、多種多様に残存するが、この博物館の肖像画は、この近辺の所有者から2006年に博物館に寄贈された油彩画であり、グラフィニー夫人が生前、戯作『セニ』の成功を収めた直後に自ら依頼して描かせた原画である。また文通相手ドゥヴォー（通称パンパン）がナンシーの自宅に残した手稿文書の一部を——博物館の購入により存在することがわかっていた——、博物館館長の許可を得て閲覧することができた。その文書はドゥヴォーがグラフィニー夫人やヴォルテールなどに宛てた書簡の写しであるが、ドゥヴォー

の筆跡と交友関係を知る手掛かりとなる。この手稿文書は、ドゥヴォーの書簡の書簡集が今も未刊行であるだけに貴重である。さらに2012年にリュネヴィル宮で開催されたグラフィニー夫人に関するシンポジウムの報告書が、2020年ようやく出版に至っていたことがわかり、これを入手することができたことも大きな収穫であった。

(5) 同じく最終年度の夏の調査によるものであるが、ナンシーの市立図書館（スタニスラス図書館）に通い、ヴァランタン・ジャムレ・デュヴァルの著作及び研究書の閲覧ができたことも大きな成果である。デュヴァル自身が晩年に書いたとされる自伝も閲覧することができた。市立図書館の調査の過程で、デュヴァルが公国の過去の宝物である貨幣などについての著作を出版しているも明らかになった。また、そのことから王宮で占めていた彼の地位が、単なる図書館司書に留まるものではなく、その中枢部にあつて公国の再建に深く関わっていたこともみえてきた。リュネヴィル宮の政務の停止後、彼はロレーヌ＝エ＝バル公国の息子フランソワ1世とともにトスカナやウィーンにも同行している。またリュネヴィル宮の停止後も、デュヴァルとグラフィニー夫人の間には書簡のやり取りは続いていたことも判明した。トスカナやウィーンから、彼はグラフィニー夫人と書簡を通じて交流し、フランソワI世との関係をつないでいた可能性がある。一方、リュネヴィル宮については、当時の間取りや構造などについても、地方の文献を通じて知る手がかりを得た。デュヴァルとグラフィニー夫人のリュネヴィル宮での交流についての文献調査はまだ始まったばかりであるが、今回得られた文献や情報をもとにさらに検討を加えていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長谷川まゆ帆	4. 巻 XXVI
2. 論文標題 近世フランス農村における「多数決」について：一七七四年マコン小教区の村総代選出における紛糾事例	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『地域文化研究専攻 紀要 Odysseus』	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川まゆ帆	4. 巻 51
2. 論文標題 古い寺院を内側から爆破する ジャブロンカ『歴史は現代文学である』に寄せて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会文学	6. 最初と最後の頁 74-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Mayuho HASEGAWA	4. 発行年 2022年
2. 出版社 De Gruyter Oldenbourg	5. 総ページ数 657
3. 書名 Western Historiography in Asia: Circulation, Critique and Comparison	

1. 著者名 長谷川まゆ帆（長谷川貴彦編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 284
3. 書名 エゴ・ドキュメントの歴史学	

1. 著者名 長谷川まゆ帆 (東大教養学部歴史学学会編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 224
3. 書名 歴史の思考法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------